

熱い思いをもって

競走馬を支える馬主たち

生産者が手塩にかけて育てた馬は、馬主との出会いによって、競走馬として歩き始めます。

ばんえい競馬の馬主の現状

愛馬の活躍に想いをのせて

平成二十八年九月現在、一般社団法人ばんえい競馬馬主協会に会員登録する馬主は、三一〇人。地域別に見ると、青森、熊本、首都圏など道外は約一割。大半が道内で、そのうち道東が約三分の一を占めています。

ばんえい競馬が最も華やかだったバブル時代、馬主数は七百人近くを数え、競馬場には馬主のための専用席が設けられていたほどでした。当時に比べると馬主数は半減し、生産者同様、高齢化が進んでいます。わずかながら若い世代の参入も見られますが、多くが五十代から八十代。全盛期の頃ならばばんえい競馬を見守ってきた世代です。こうした息の長い馬主たちによって、今日のばんえい競馬が支えられています。

そもそも、ばんえい競馬の「馬主」とは、地方競馬全国協会の馬主登録を受け、馬登録された競走馬を所有する人を指します。馬主登録を受けるためには、個人の場合「年間所得五百万円以上」など、地方競馬一律の厳しい条件があり、安定した経済基盤が必要です。生産者から馬を購入した後も、牧場などへの預託料、きゅう舎に預けてからは調教師への月々の預託料、さらに馬の診察費用、蹄鉄費用などが必要で、それに対し、馬主が得られる収入は、賞金、出走手当、着外手当などの報償金。収入が支出を大幅に上回るケースは、ばんえいに限らず、競馬界全体を見てもほんの一握りです。

それでも馬主は、重賞レースで愛馬が勝ち星を上げ、いつか最高

峰レースの「ばんえい記念」に出走できる馬に育ってくれることを願い、馬を支え続けています。実際に馬を育てあげていくのは調教師ですが、数多く出走させるのか、長く大事に走らせるのかなど、基本的な方針を決めるのは馬主です。調教師の手に委ねてからもきゅう舎を訪れたり、レース前に電話で馬の調子を尋ねたりと、愛馬を我が子のように思う気持ちは、どの馬主も変わりません。純

粋に馬が好きだから、ばんえいが好きだから、という馬主たちの熱い思いが、ばんえい競走馬を育てていくのです。

取材協力／一般社団法人ばんえい競馬馬主協会

ばんえい競馬馬主協会 ニュース

馬主協会ニュース

ばんえい競馬馬主協会 ニュース

馬主協会ニュース

馬主だより

馬主だより

馬主だより

馬主だより

一般社団法人ばんえい競馬馬主協会は、ばんえい競馬の馬主を正会員とし、「ばんえい競馬馬主協会ニュース」や「馬主だより」を発行。事業の一環として、ばんえいアプリ、「ばんえい十勝日誌」など一般向けの情報提供、「JRAジョッキーDAY」の開催など、広くばんえい競馬の普及啓発活動も行う。